

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月21日現在

機関番号：32665

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820062

研究課題名（和文） ナショナル・アイデンティティと日本近代—坂口安吾を中心に—

研究課題名（英文） A national identity and Japanese modernization
—At a center Ango Sakaguchi —

研究代表者

山根 龍一 (YAMANE RYOICHI)

日本大学・商学部・助教

研究者番号：40584909

研究成果の概要（和文）：(1)20世紀の日本を支配したマルクス主義思想等の実態を多角的に捉えた。(2)その上で、それらに対抗する思想大系（仏教、東洋思想、ダダイズム、アナキズム）の所在を明らかにした。(3)戦前・戦時中と敗戦直後を、〈連続〉と〈断絶〉という観点から、複眼的に捉える視点を養った。(4)その上で、被占領下の日本でなぜキリスト教が要請されたのか、という人文諸学を横断する学際的な問いを、具体的に考察する端緒を得た。

研究成果の概要（英文）：(1)The actual conditions, such as Marxism thought which governed Japan in the 20th century, were caught on many sides. (2)The whereabouts of the thought (Buddhism, oriental thoughts, dadaism, anarchism) which moreover opposes them was clarified. (3)The viewpoint which catches prewar days and the postwar period from various points of view was supported. A viewpoint from various points of view is exactly a viewpoint of <continuation> and <rupture>. (4)The start which considers concretely the interdisciplinary question which crosses humanities sociology was acquired. An interdisciplinary question is why Christianity was demanded in occupied Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	490,000	147,000	637,000
2011年度	370,000	111,000	481,000
年度			
年度			
年度			
総計	860,000	258,000	1,118,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：ナショナリズム・主体

1. 研究開始当初の背景

(1) はじめに

1990年代は、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(’83)を重要な参照軸として、「ネーションは想像された共同体にすぎない」という共通認識が領域横断的に確立した時代であった。また今日の国際社会におい

ては、地球規模の市場経済のグローバル化によって、国民国家の枠組みは自明性を失いつつある。そしてこれらの大規模なパラダイム転換に伴い、ネーションを基本単位とするナショナリズムの問題は、すでに歴史の表舞台から退場したかに見える。

だが本当にそうだろうか。というのも、今

日の世界的なボーダレス化現象の進行は、さまざまな局面において異文化間の軋轢を生み出している一方、世界各地で「再ナショナリズム化」とでも言うべき反動現象を生み出しつつあるからだ。近年の日本でも、対東アジア外交における歴史認識・戦争責任の問題や、「愛国心」涵養という名目の下に行われた教育基本法改定、あるいは他者性を欠いた排他的ナショナリズムの若年層への浸透といった問題が、様々な国内メディアを賑わしたことは記憶に新しい。

これらの諸事例が示唆しているのは、ナショナリズムは今なおアクチュアルな国際的課題として在るということであり、本研究の主要な動機は、この課題に積極的にコミットしていきたいということである。

(2) 本研究を遂行する上での問題点

ただし、今日如上の研究を遂行するためには、1990年代に盛んに行われたごとく、ネーションの歴史的社会的な構築過程を記述するだけでは不十分である。なぜなら、そうした、ネーションの構築性・虚構性を暴き出す構築主義的な議論のみで、ナショナリズムの問題を乗り越えられるわけではないからだ。ナショナリズムをめぐるこうした問題点を解決する方策は次の点にある。

(3) 解決方策

1990年代の国民国家論の知見を踏まえた上で、今度は、言説構築物・虚構としてのネーションと個々の〈主体〉がどのように関わり合っているのかを問うこと。つまりナショナリズムの問題を、具体的個別的な〈私〉＝〈個〉におけるナショナル・アイデンティティ形成の観点から再考すること。

以上の見解に基づき、本研究では、ナショナリズムの問題にコミットしていく有効なサンプル・ケースとして、坂口安吾(1906～55)と彼の文学作品に対する多角的なアプローチを採用する。その理由は、坂口安吾がナショナル・アイデンティティの問題を、あくまで彼自身の〈主体〉に即して、「日本(人)」ないし「日本文化」の内と外から、ラディカルに思考し続けた稀有な文学者であるからにほかならない。

(4) 結び

ある文学作品が、「日本(人)」ないし「日本文化」をめぐる同時代の歴史的社会的状況とどのように具体的に切り結び、その切り結び方の背景には、いかなる思想・教養がバックボーンとして存在していたのかを実証的に明らかにすること。このような作業を経て初めて、1930～1940年代のナショナリズムを中心とする諸問題は、坂口安吾という一人の作家に即した特殊性の領域から解放され、現代の我々も参照するに足る客観性と普遍性を獲得することができるはずだ。

繰り返して言えば、自民族中心主義的な排

他的ナショナリズムの台頭は、過去の亡霊と云って片づけられない、今日喫緊の国際的課題である。また、検閲という露骨な言論統制こそ無いものの、自主規制という名の下に、隠微な形で権力を内面化した様々な情報が日々メディアを通じて配信される今日、当時の言論統制下でどのような〈主体〉的言語表現が可能(あるいは不可能)であったかを検証することは、現代のメディア・リテラシーの観点からも有益であると信ずる。

本研究は、そのような大局的観点から、ナショナリズムを中心とした現代国際社会に連なる諸問題にコミットし、それらの問題をめぐる議論の今後のあり方について総合的に検討するものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ナショナリズムを中心とした現代国際社会に接続する諸問題を、坂口安吾と彼の文学作品に対する多角的なアプローチによって考究することにある。具体的には、坂口安吾におけるナショナル・アイデンティティ形成の具体的プロセスを、以下の二つの観点をもとに、総合的に検証する。

- (1) 作家〈主体〉の思想・教養がどのように構築されたのかを明らかにする通時的観点。
- (2) 個々の作品執筆を通して、どのように〈主体〉的に同時代状況と切り結んだのかを明らかにする共時的観点。

以上の見通しのもと、坂口安吾の文明批評の独自性を多角的に解明することで、言説構築物・虚構としてのネーションと、個別的〈主体〉がどのように関わったのか(どのように関わりうるのか)を、現代につながる問題として問い直すことが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では、上述の「研究の目的」を遂行するために、以下の二つの研究方法を採用する。(その際、抽象的な議論や恣意的な坂口安吾像の再生産へと後退しないよう、坂口安吾の文学作品の精読と、徹底した資料踏査による裏付け作業を二大原則とする。)

(1) 一つ目の研究方法

哲学(倫理学・宗教学)・芸術学・文学・史学などを横断する学際的な視座のもと、作家〈主体〉の思想・教養形成過程を、作品の精読と文献資料の踏査によって通時的に解明する。具体的には、作家デビュー以前に坂口安吾が在籍していた大学や語学校を中心とする文化圏に焦点を絞って、調査を行う。

① 調査の見通し

坂口安吾の教養はそのハイブリッドな形成過程に最大の特徴がある。それは、彼が在籍した各学校を圍繞する文化環境からもうかがえる。たとえば、安吾が在籍した豊山中学校のあった護国寺前の喫茶店「鈴蘭」は、

当時、前衛美術家団体「マヴォ」の展覧会会場・会場場所となっており、また、東洋大近傍にあった南天堂書店の二階が、多くの社会主義者やアナキスト・ダダイストの交流場であったことは有名である。その意味で、アナキスト・ダダイストの辻潤(南天堂の常連で、安吾在籍時のアテネ・フランセにも通っていた)との交流を重視するなら、安吾の思想の核をアナキズムと見る柄谷行人氏の近年の指摘は傾聴に値する。

東西異文化を往還する越境的教養と、アヴァンギャルド、アナキズムの異種混淆体。みずからを「日本人」と規定しつつ、「東洋」と「西洋」、「ネーション」と「個人」を鋭く問題化する坂口安吾の特異な文明批評は、こうした混成的な思想背景から形成された、彼固有のナショナル・アイデンティティに由来するのではないか。この見通しを、当時の文化環境を伝える文献資料の踏査と安吾の蔵書調査の両面から、以下の手順で考察する。

② まず、関井光男氏の先駆的な業績(’99)や、東洋大学文学部教授陣の実証的研究(’07)等を参考に、安吾在籍時の東洋大のカリキュラム・指導教員・成績等を整理する。その上でそれらを同大学に赴いて実際に確認し、安吾が学んだ印度哲学・仏教・倫理学関係資料を、あらためて調査・精読する。

③ 関井氏の近業(’05)等を参考に、アテネ・フランセでの活動の実態を、交友関係・勉強会・読書遍歴等を視座として、当時の入学案内冊子、校友会会報等から調査する。

④ 当時のアヴァンギャルド芸術の資料(「マヴォ」、南天堂関係の資料等)を渉猟する。併せて、坂口安吾とアナキスト・辻潤の思想的共軛性を、『自我経』(’21)等、Max Stirner を中心とする辻のアナキズム関係の翻訳書の精読を通して明らかにする。

⑤ 以上を文献実証的に補強するため、坂口安吾研究会での活動等を通して構築した人的ネットワークを基に、新潟市、新津美術館、安吾の令息・坂口綱男氏等との連携を図り、安吾の蔵書の書き込み調査を行う。この作業は『坂口安吾蔵書目録』(’98)をフル活用することで、仏教系・アナキズム・社会主義・海外文学関連の蔵書に的を絞って行う。

(2) 二つ目の研究方法

(1)と同様の学際的な視座のもと、文学作品の執筆を通じた、坂口安吾における同時代の歴史的社会的状況との〈主体〉的な距離の取り方の実態を、作品精読と文献資料の踏査によって共時的に解明する。具体的には、第二次世界大戦後初期の作品に対して行われた検閲の実態に焦点を絞って、調査を行う。

① 調査の見通し

1945~49年にかけて、連合軍総司令部(GHQ/SCAP)民間検閲局(CCD)は、対日占領政策の迅速な浸透と言論の徹底的取り締まりを行う

ため、大規模なメディア検閲を行った。そして、日本側から「配給された『自由』(河上徹太郎、’45・10)と皮肉られた、「言論の自由」と「検閲」との明らかな矛盾は、敗戦後の「日本(人)」が、“被占領”という状況下でいかなるナショナル・アイデンティティを〈主体〉的に構築することが可能かという難題を浮上させたのである。

『『民主』と『愛国』の両立』(小熊英二、’02)という、一見奇妙な事態の出現。戦後いち早く、兄坂口献吉宛書簡(’45・9)の中で、米国の「実質主義」を範とする新日本建設の要諦を説き、「私は真の愛国者です」と書き送った坂口安吾もまた、如上の難題に直面していた。戦時下日本のさまざまな事象(例えばB29による空襲など)を題材に、戦後の言論活動を展開しようとした安吾にとって、被占領下の検閲制度は、その創作意識とナショナル・アイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしたのか。このような問いを立て、具体的には、以下の手順で研究を進める。

② まず、山本武利氏、横手一彦氏らの業績等を参考に、被占領下の言語空間に関する今日の問題機制と基礎知識を養う。その上で、安吾研究の領域における先駆的な研究(時野谷ゆり氏(’03)ほか)に目配りしつつ、検閲による削除・訂正が行われた戦後の安吾作品を、『マイクロフィルム占領軍検閲雑誌』(’82)、ネット上の「占領期新聞・雑誌情報データベース(<http://m20thdb.jp/>)」(’02~)等を活用してリストアップする。

③ その後、国立国会図書館・早大中央図書館等に収蔵されている国内のGHQ/SCAP関連資料にあたって検閲の痕跡を精査すると共に、米国メリーランド州立図書館・米国議会図書館・米国公文書館等に収蔵されている原資料も渡米して現物を確認する。

④ こうして得られた一次資料を基に、検閲が作品の構造、作家の創作意識やナショナル・アイデンティティ形成にいかなる影響を与えたのかを、被検閲作品の本文校合と精読から考察する。

(3) 補足

人間あつての文学である以上、坂口安吾その人の足跡をたどるためには、彼(の文学)とゆかりの深い、京都(桂離宮など)、小田原、桐生などの臨地研究も可能な限り行うこととする。

4. 研究成果

(1) 2010年度の研究成果

「研究の方法」で述べた「一つ目の研究方法」に関し、以下の3つの成果があった。

① 東洋大学在籍時代(1926~1930)に坂口安吾が学んだ哲学・宗教・倫理学関係資料を調査する過程で、『マルキシズムと宗教』(大鳳

閣書房、1930)等を購入し、「マルクス主義と宗教の思想的相克」という、同時代的な問題が見えてきた。

② 1920～30年代の前衛芸術資料を調査する過程で、以下の二つのことが、資料を通して具体的に確認できた。一つは、坂口安吾に影響を与えた可能性が高いのは、前衛芸術団体「マヴォ」のドイツ・ロシア経由の前衛芸術理論よりも、高橋新吉・辻潤らによる東洋思想と結合したダダイズム・アナーキズム芸術理論であること。もう一つは、詩誌『白山詩人』（東洋大学詩人協会、1926～1929）を調査したこと等により、当時の東洋大近辺には「白山・南天堂」文化圏とも言い得る知的コミュニティが存在していたことである。

③ 2010年9月19日、坂口安吾研究会を介して新潟市新津美術館を訪問、遺品資料の調査を行った。何点かの貴重な書き込みを電子データ化できたと共に、職員の方、安吾の令息・坂口綱男氏との人的ネットワークを構築できた。

④ 国内外における位置づけとインパクト

以上の研究成果は、「ネーションと個別的〈主体〉との関係の仕方の考察」という本研究の目的に照らし、以下の点で重要である。

第一に、20世紀を支配したパラダイムであるマルクス主義の実態を多角的に考えることが可能になった点。第二に、マルクス主義に対抗(または代替)する思想大系として、仏教を中心とした東洋思想ないしそれと結び付いたダダイズム・アナーキズム理論が、特定地域を拠点とする人々の間にジャンル横断的な形で根強く存在していたことを明らかにした点。第三に、坂口安吾の蔵書整理(データベース化)を共同で行う端緒が開けた点、また必要な時に必要な手続きをとって遺品資料にアクセスする土台が整った点。

これらの点を踏まえるならば、本研究の成果は、ナショナリズムも含めた20世紀日本の主要なパラダイムを近代日本文学との結節点において問い直すという、思想史・文化論の領域から見た、巨視的な意義とインパクトを持つと言えよう。また微視的に見れば、1920～30年代に坂口安吾が身を置いた文化的環境をある程度明らかにし、彼の蔵書にアクセスしたことは、坂口安吾の文明批評の特異性を解明する基礎的な条件を整えた、という意義とインパクトを持つと言えるだろう。

⑤ 今後の展望

今後は以上の研究成果をもとに、坂口安吾の「ファルス」理論や「ふるさと」概念の解明を行い、主として1930～40年代の日本の主要なパラダイムとどのように切り結んでいたのか、その思考のあり方を考察する予定である。

(2) 2011年度の研究成果

「研究の方法」で述べた「二つ目の研究方

法」に関し、以下の2つの成果があった。

① 横手一彦氏、山本武利氏らの業績を参照し、被占領下の言語空間に関する基礎知識と今日的な問題規制を養うことができた。具体的には、『被占領下の文学に関する基礎的研究(論考編)』(横手・1996)、『占領期メディア分析』(山本・1996)、『占領期文化をひらく』(山本・2006)、『占領期雑誌資料大系』(大衆文化編全五冊・2008～2009、文学編全五冊・2009～2010)などを購入し、精査することで、敗戦直後に特有の問題(〈連続〉と〈断絶〉)を実証的に把握することができた。戦前・戦中の内務省による検閲から敗戦直後のGHQ/SCAPによる検閲への移行、これが検閲制度を仲立ちにした〈連続〉面であるとすれば、〈断絶〉面とは、敗戦直後の検閲が“外国の軍隊”によって行われたそれであるという点にはほかならない。

② ①の成果をもとに、アメリカという他者によって与えられた「言論の自由」と「検閲(言論の監視・束縛)」という二重基準の中で、言葉によるいかなる〈主体〉構築が可能かという問いを立てた時、坂口安吾とも関わりの深い文学者・石川淳の敗戦直後の小説作品が、喫緊の論究対象として浮上してきた。

③ 国内外における位置づけとインパクト

以上の研究成果は、「ネーションと個別的〈主体〉との関係の仕方の考察」という本研究の目的に照らし、以下の点で重要である。

第一に、戦前・戦中と敗戦直後とを、検閲〈主体〉の移行に伴う〈連続〉と〈断絶〉の角度から複眼的にとらえる視座を養うことができた点。第二に、キリスト教(旧・新訳聖書)と戦後風俗(「闇市」や「浮浪児」など)とを巧みに交錯させた石川淳の小説世界を論究対象として見定めることで、敗戦直後の歴史的社会的状況下におけるナショナル・アイデンティティ形成の問題を、言語表現上の問題として具体的に考察する端緒が開けた点。

これらの点を踏まえるならば、本研究の成果は、「被占領下の日本において、なぜキリスト教という普遍宗教が要請されたのか」という哲学(倫理学・宗教学)・文学・史学等の人文諸学を横断する問いにかかわる、学際的な意義とインパクトを持つと言えよう。なお、そうした意義とインパクトの一端を論証するために、石川淳の敗戦後の代表作「焼跡のイエス」(1946)をめぐる論考を2012年度中に発表する予定である。

④ 今後の展望

今後は以上の研究成果をもとに、敗戦直後のキリスト教・マルクス主義・実存主義等をモチーフにした文学作品広範に論究し、1940年代の思想・言語空間を、より多角的に問題化していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- (1) 山根龍一 (単独執筆)、「坂口安吾「黒谷村」論——〈理想主義〉を問い直す“詩的遠近法”の言語戦略——」、『國語と國文學』、査読有、第89巻第6号、東京大学国語国文学会編、2012年6月、明治書院、pp. 53-69
- (2) 山根龍一 (単独執筆)、「坂口安吾「日本文化私観」論——記憶の問題を中心に——」、『國語と國文學』、査読無、第87巻第5号、東京大学国語国文学会編、2010年5月、ぎょうせい、pp. 119-130

[学会発表] (計2件)

- (1) 山根龍一 (パネル発表)、「「有事」と「境界線」——坂口安吾「真珠」を中心に——」、日本近代文学会春季大会、2012年5月27日、二松學舎大学 (九段キャンパス)
- (2) 山根龍一 (単独発表)、「坂口安吾「黒谷村」論」、日本大学国文学会、2011年7月2日、日本大学文理学部 (百周年記念館 国際会議場)

[図書] (計1件)

- (1) 河野龍也、佐藤淳一、古川裕佳、山根龍二、山本良 (共同編著)、三省堂、『大学生のための文学トレーニング 近代編』、2012年1月、pp. 67, 112-140, 174-185, 204-205

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山根 龍一 (YAMANE RYOICHI)
日本大学・商学部・助教
研究者番号：40584909